

結局は肯定の感情

加藤
秋吉
金子

客入れ

効果、スモーク

照明、暗転

加藤、板付き

照明、白系が数本

照明、うつすらと加藤狙い

加藤

お願いがあります。

迎えに来てください。

お願いします。

迎えに来てください。

お願いします。

迎えに来てください。

音楽

照明、暗転

音楽、アウト

金子、上手側に、下手を見るように立っている

加藤は、そのまま

照明、青系が数本

照明、金子狙い イン

金子

暑い、暑い日でした。

目の前の景色が歪むような暑い日。

歪んでいたのが景色なのか、私なのかは分からない。

どちらもなんだろうと思う。

生まれたときから、景色は歪んでいたし、その時の私は、確実に歪んでいた。

強い陽射しが、コンクリートを溶かしているのか、コンクリートと接しているスニーカーの靴底を溶かしているのか、不快な匂いと感触が足元に伝わるが、私は動くことができません。

にいた。

ああ、暑いな。

そう思いながら、私は車通りもない、木陰も無い、歩道に立っていました。

つぶやくように、意味の無い「ちくしょう」を言葉として発し、それがいつたい何になる
というのだと思い、また「ちくしょう」と、つぶやくように発したのです。

叫べばよかったのだ、意味なんて無くて良い、何に対してじゃなくて良い、ただ、体いっ
ぱいで、叫んでみれば良かったのだ。

視界に、季節はずれのとんぼが落下しているかのように飛翔していました。

ギリシヤの神話か何かに、羽根を太陽に焼かれる話があったようなことを思いました。

あれはどんな話だったっけ。

傲慢な人間に、神が罰を与えるような話だったように記憶している。

傲慢な人間に、謙虚な人間が罰を与えるなら納得もできるが、そんな不慮の事故のような
酷い話に、どう納得すれば良いというのだ。

罰を与えられた人間は、「ちくしょう」と叫んだんだろうか。

::

結局私は、まだ一歩も動いていない。

ちくしょう。

照明、金子狙い アウト

下手側に秋吉が、上手を向き立っている

加藤、金子はそのまま

照明、秋吉狙い イン

秋吉

仮の話です。

私の父が犯罪者だとして、私に真つ当な市民権が存在すると思いますか。

それまで普通に暮らしていたのにもかかわらず、ある日を境に、私は犯罪者の息子になる
んです。

それを私の周囲は受け入れることができますか。

私自身が受け入れられないのに、どうやって、周りが受け入れられるというのですか。

重要なのは、どんな経緯で犯罪が起きたのかじゃないんです。犯罪が起きたことが重要な
んです。

あなたは私を受け入れてくれますか。

みんな受け入れると言います。

そしてその言葉を聞き、本当に嬉しく思うんです。

でも、私は最初から分かっているんです。期間があるということに。

そして、その期間は、私が想像しているより短いということを。

セミの寿命は短いと言うが、実際には1ヶ月程度は生きているらしい。

それでも1ヶ月もすれば、この世から存在しなくなると思えば救いがある。

セミの様な耳障りな音を、私は一体どれだけ聞いていけば良いのだろう。

私はセミじゃない。

私の周りがセミだったらいいのに。

1ヶ月なら我慢できるのに。

::

仮の話です。

あくまでも、仮の話です。

照明、暗転

照明、赤糸が教本

照明、加藤狙い

金子、秋吉はそのまま

加藤

好きでした。

はい。

その辺に転がってる位の。

はい。

あなただつてそうでしょ。

そうですね。僕の話だ。

何から話せば良いですか。

じゃあ、最初から。

最初から話をさせてください。

何か分かるかもしれない。

そう。

僕自身が。

僕には分からないんです。

あなたが言ってることが。

あなたもそうでしょ。

そんな顔をしている。

だから最初から話をさせてください。

最初は、…最初は、…最初は、

最初はどこなんだろう。

最初は、僕なんだろうか。

それとも、

出会い。

ああ、なるほど。

::なるほど。

彼女との出会いだ。

出会いはあれです。

会社の先輩に誘われた飲み会でした。

ああ、ちょっと待ってください。

僕の話をしてもらいますか。

僕の話をしなければ、きっと分からないと思うんです。

そう、僕自身が。

だから僕の話を見せてください。

僕は自分に自信が持てない人間なんです。

特に女の人に対して、自信が持てない人間なんです。

僕が小さい時に母親が亡くなって、僕はずっと父親に育てられてきました。

そしてさらに、僕はずっと男子校に通っていて、女の人と接する機会がほとんどありませんでした。

だから、女の人と話すのに対して、苦手意識の様なものがあるんです。

苦手意識と言うより、どう話して良いか分からないって言えば良いのかな。

上手く喋られないんです。

それでもお付き合いをした人は何人かいました。

長く続いたことはありませんが。

それは社会に出ても変わりませんでした。

職場の女の人に対しても、慣れることもなく、仲良く話したいのに話せない。

その内、じつと見られてる様で、気持ち悪いと思われる始末でした。

その度に僕は、逃げるように転職をし、そんな状況下で、仕事も大して出来るわけもなく、結局僕は、全てのことにに対して、自信が持てない人間に成ってしまいました。

そんな中で、あの職場は快適だった。

男しかなくてね。

男子校時代の様に、僕は清々しく生活することができたんです。

もちろん、女の人が嫌いな訳じゃないので、男だらけの、どうでも良い卑猥な妄想の話は大好きでした。

周りは、僕がたまに発言する、卑猥な妄想に爆笑してたし、たまには一緒にキヤバクラの様な所にも行きました。

そう、女の人との飲み会にも誘われたりしました。

こいつはむつつりだとか、いじられたりしましたが、偶で愛想笑いをしてれば良かったので、それなりに楽しかった。

その時も僕は、教合わせで呼ばれて、いつも通り、所在なくテーブルの隅で、愛想笑いを浮かべていました。

彼女は僕の向かい側に座っていて、僕と同じような愛想笑いを浮かべていました。

かと言って、何かを通じ合ったとかそういうことはありません。

彼女は僕と違って、特別綺麗という訳ではありませんでしたが、普通に綺麗で、おとなしそうな感じは、それなりにもてるだろうと僕は思いました。

ただ、話に上手く入っていかず、愛想笑いを浮かべている姿は、自分を見ているようで、若干心が苦しくなったことを覚えています。

それでも、飲み会も残り僅かの辺りで、僕と彼女は、何となく、話をするようになったんです。

おそらく、僕と彼女にとっては、かなりの盛り上がりだったはずですよ。

周りから見れば、小声で、目も合わせることもなく、何が盛り上がりだと思っただけかもしれませんが、僕と彼女にとっては、かなりの盛り上がりだったんです。

正確には覚えてませんが、僕からなのか、彼女からなのか、それとも、周りからなのか、僕と彼女は、連絡先を交換しました。

::

少し休んでも良いですか。

::

整理、整理させてください。

今言ったことが本当なのか。

それとも僕の願望なのか。

いや、本当なんです。

全て本当なんです。

だから、この後のことも、少し整理させてください。

照明、暗転

照明、黄系が数本

照明、舞台中央

秋吉 ほら、立て。

加藤、照明の中へ

金子、秋吉、無表情に叫ぶわけではないが、響く声で

金子 間違ってる。

秋吉 間違ってる。

金子 間違ってる。

秋吉 間違ってる。

金子 間違ってる。

秋吉 間違ってる。

金子 間違ってる。

秋吉 間違ってる。

加藤 ::

金子 ::

秋吉 ::

加藤 間違ってるんですか。

金子 間違ってます。
秋吉 そう思いませんか。
加藤 わかりません。
金子 私たちより長く生きてるのに。
秋吉 私たちより長く生きてるからこそです。
金子 かわいそう。
秋吉 そう、かわいそう。
加藤 僕は、かわいそうなんですか。
金子 かわいそう。
秋吉 かわいそうだつてことに、気づいていないことが、本当にかわいそう。
あなたの様に年を重ねるといふことは、重さに耐えられなくて、畳まれていくといふことなんです。
いつの間にか畳まれて、身動きが取れなくなる。
加藤 押し潰されてるといふんですか。
金子 あなただけじゃない。
秋吉 そう。
加藤 あなたたちも。
金子 私たちは違う。
秋吉 そう、私たちは違う。
加藤 俺より若いから。
金子 違います。
私たちが知ってるから。
秋吉 そう、私たちは知ってるから。
加藤 何をですか。
金子 間違つてることを。
秋吉 そう、私たちは、間違つてることを、しっかりと理解しているんです。
加藤 どうすれば理解できるんですか。
いや、僕にも、僕にも理解することが出来るんですか。
金子 あなた次第です。
加藤 僕次第。
秋吉 そう、あなた次第。
加藤 ∴
そう、結局は、僕次第なんです。

照明、暗転

照明、青系数本

照明、金子狙い イン

金子 私はLGBT、レズビアン、セクシャルマイノリティです。

当たり前ですが、私には好きな人がいました。
人並みの期間、こと、人並みの回数で、好きな人がいました。
そしてそれは、女性です。
あなたが誰かを好きになると同等の感情を、私は同性の女性に対して抱くだけです。
しかし、私はその想いを秘めてきました。
よく色々な人に聞かれました。
いつから。
あなたはいつから異性を好意の対象として捉えたか記憶がありますか。
単に誰かを好きになるという感情でしょう。
いつも何もない。
その都度その都度、誰かを好きだった。
そして、それが同性だった。
それだけのことでしょう。
聞かれる度に嫌悪を抱いて、ずっとそう思ってきました。
しかし私は、その想いを秘めていました。
べらべらと笑うアイドルを、周りに合わせて格好良いと言ひ。
ただ単に運動神経が良いと言ひだけの男を格好良いと言ひ。
とりあえず、周りが格好良いという男を、私も気になつてると言ひ続けてきました。
でも本当は、反吐が出る思いでした。
誤解しないでください。
どうしても良い男たちじゃないです。
偽っている自分自身にです。
目の前の現実が、遠い世界に感じる自分自身にです。
不思議なもので、寝ている時に見る夢でさえ、遠いんです。
∴
私の前の世界は、起きてる時も、寝てる時も、常に私から遠かった。

照明、金子狙い アウト

照明、秋吉狙い イン

秋吉

仮の話です。

私に人一倍の正義感があつたとして、その正義感が発揮できる社会は存在すると思ひますか。

誰かを貶めることは簡単にできたとしても、貶められた人を助けることは容易ではありません。

分かつてはいるんです。

社会は感情で出来ていない。

しかし、感情は存在する。

いや、社会は感情で出来ているのかもしれない。

その感情の振れ幅が均等じゃないだけ。

遙か昔から続く、正義と悪の不均等。
正義が勝つのは、人が作った妄想の中だけであること。
そして、私の正義が薄っぺらな、絶対的なものではないことを。
私を納得させる明確な理由を、私は見出すことができなかった。
加害者と被害者。
その関係性の拡がり考えたことはありませんか。
その拡がり、心を向けたことがありますか。
私自身も言っていたかもしれません。
時間が必要だと。
その内に落ち着くよと。
風化すると。
吹く風の様になると。
無くなるわけじゃない。
風と化すことが良いことなんじゃないか。
私は風よりも無力です。

::

そう、私は無力でした。
身体の中で大きくなるしめつとしたものを、乾かせるような風になるわけでもなければ、
身体にまとわりつく様なしめつとした風にもなれない。
そう、私は無力だったんです。

::

仮の話です。
あくまでも、仮の話です。

照明、暗転

照明、赤系が数本

照明、加藤狙い

金子、秋吉はそのまま

加藤

音がしたんです。
カラカラカラって、乾いた音が。
まるで、僕たちという人間から鳴っている様に、空っぽで乾いた音が。
すみません。
何のことかわからないですよね。
そう、僕たちは付き合うようになりました。
::
どこまで話したんですか。
そう。
連絡先を交換したつてとこだ。

そうだそうだ。

連絡先を交換したんです。

実に我々らしいんですが、飲み会で連絡先を交換したにも関わらず、1ヶ月ほど、その連絡先を使うことはありませんでした。

その後たまたま先輩と飲んだ時に、二人のその後を聞かれ、何もしてないことを告げたところ、上司命令だという訳のわからない理由で、半強制的に、僕は彼女に連絡することになりました。

彼女が僕に好意を持っていたかは分かりませんが、彼女は僕の誘いを快く受けてくれました。

僕たちは、何度か一緒に食事をしたりして、年相応な流れで付き合うことになりました。最初の頃は、食事をした後、何となく近場のラブホテルに行くことが多かったのですが、何回か会っているうちに、彼女の部屋で食事をするようになり、そして、そのまま彼女の部屋に泊っていく様になったんです。

その様な状況になっても、僕は彼女の僕に対しての好意に、自信を持つことができませんでした。

かと言って、彼女の中に、僕以外の誰かがいるようにも思えませんでした。

ただ、僕では埋めきれない、何か空洞のようなものが彼女の中にあることを、僕は何となく感じていました。

それとは反対に、僕は彼女という時間に落ち着きを感じたし、確実に彼女に対する想いを大きくしていました。

::

彼女の部屋には常に緩やかな風が吹いていました。

天井から風鈴を吊るしていて、小さな扇風機の風を、風鈴に当てていたんです。

彼女が部屋に入って、電気を点けた後に、まず最初にすることが、風鈴に風を当てることでした。

カラカラカラって音は、その風鈴の音です。

僕は彼女に聞いたことがありました。

窓に吊るさないのかと。

「この部屋には何も入れたくないの」

彼女はそう答えました。

そして続けて言いました。

「良い音でしょ。」と。

実際に、彼女が窓を開けることは、滅多になかったのですが、風鈴の音のせいか、あの部屋で息苦しさを感じたことはありませんでした。

僕たちは、ただ、その乾いた音を聞きながら、空つばの自分たちを確かめるように、抱きしめあいました。

::

彼女を抱けば抱くほど、彼女の中の空洞が大きくなっている様な気がしましたが、

僕はその事に気づかないふりをして

僕は、幸せというものを感じていました。

そう言い聞かせていました。

∴

そして、彼女は僕の前から姿を消しました。

照明、暗転

照明、黄系が数本

照明、舞台中央

加藤、ふらふらと照明に入る

以下の台詞、加藤 最初は声が小さい。

秋吉、金子は、そんな加藤を煽るように

加藤、段々と声が大きくなる

そして、間

秋吉 お前は弱い。

金子 お前は弱い。

加藤 お前は弱い。

秋吉 ∴

金子 ∴

加藤 ∴

僕は弱い。

秋吉 そう。

私も弱い。

金子 そう。

私も弱い。

加藤 ∴

強くならなければいけませんか。

秋吉 何故そう思うんです。

金子 言っただけでしょう。

私も弱いつて。
加藤 皆さんは、弱くはない。
秋吉 言っただけでしょう。
私も弱いつて。
金子 何故そう思うんですか。
加藤 ∴
何故でしょうか。
秋吉 そう思いたいから。
金子 自分以外の人は強くあつて欲しい。
秋吉 少なくとも自分よりは強くあつて欲しい。
加藤 僕は強くなりたかった。
秋吉 そう、君は強くなりたかった。
金子 何に対して。
加藤 何に対して。
秋吉 誰に対して。
加藤 誰に対して。
秋吉 分からないんですか。
加藤 分かりません。
金子 分からないのに強くなるんですか。
加藤 分からないのに、強くなりたかった。
秋吉 それは腕力ですか。
加藤 腕力です。
金子 知力ですか。
加藤 知力です。
いや、違います。
違います。
そんなのじゃない。
僕が望んでいたのは、そんなことじゃない。
僕が弱いことを恥じる気持ちを、少しだけ上回る強さ。
そんなほんの少しの強さが欲しいんです。
秋吉 分かります。
加藤 分かってくれますか。
金子 私もわかります。
加藤 ありがとうございます。
ありがとうございます。
ありがとうございます。
∴
僕は、僕は強くなれるでしょうか。
秋吉 あなた次第です。
加藤 僕次第。

金子 そう、あなた次第です。
加藤 ；
そう、結局は僕次第なんです。

照明、暗転

照明、赤系が数本

照明、加藤狙い

加藤 彼女が突然姿を消したことに、僕は酷く動揺しました。
自分のせいだろうか。
自分の何がいけなかったんだろうか。
自分はどうしていれば良かったのだろうか。
僕は必死で自分を守ろうとしていました。
何回も何回も、ぐるぐると同じ所を回って。
醜いほどの自分を守る思考の後に、僕は彼女のことを、ようやく思い出したんです。
そう、その時まで、僕は彼女のことを考えていたはずなのに、顔すら思い浮かべることが
できませんでした。
僕はようやく彼女のことを思い出すことができたんです。
彼女の会社での人間関係。
彼女の会社外での孤独。
そして、セミナーのことを。
僕は彼女を探すために、そのセミナーに足を運びました。

照明、暗転

照明、青系数本

照明、金子狙い イン

金子 夏の花が、風に揺れていました。
花の名前は分からない
ですが、夏の風を気持ちよさそうに受けて、優しく。
そして、その前で、彼女の黒い髪が美しく優雅になびいていました。
何て綺麗なんだ。
私はそう思いました。
きっと彼女は夏に生まれたに違いない。
彼女の誕生日が夏じゃないことを知っただけで、何故か私はそんなことを思いました。
それ位、風に揺れる夏の花だけではなく、夏を彩る全ての要素が、彼女を引き立たせるた
めに存在していたんです。
何度も、何度も思いました。

綺麗だって。

そして、

好きだって。

私は彼女に私のことを話してませんでした。

いや、彼女だけじゃない、今まで好きになった人、誰一人として、私のことを話したことは
ありませんでした。

ですが、私はその時、一つの決めごとを私の中でしていたんです。

彼女の美しい黒い髪と、私の髪が同じ長さになった時、私は、私のことを話してみよう。

そしてそれは、おそらく冬になるだろうと、私は思っていました。

それまでにゆつくりと、ゆつくりと、ゆつくりと。

私の髪は、まだ彼女の半分位の長さでした。

強過ぎる夏の陽射しを浴びている彼女は、そう、美し過ぎたんです。

風に揺れる黒髪が。

風に揺れるワンピースの裾が。

私の心を揺らしました。

私は、私を見失いました。

彼女のことを誰よりも愛してる。

彼女のことを誰よりも大事に思ってる。

彼女のことを誰よりも理解している。

おそらく、その事に間違いはなかったはずです。

そして、それが理解されないであろうことも、私は知っていました。

そう、知っていないながら、私は、私を見失ったんです。

暑い暑い夏の日。

私は、私を抑えきれませんでした。

そして、一瞬にして、私は私を失いました。

強い陽射しと臍腹な彼女の視線が、私を、突き刺しました。

嘘嘘、冗談だから。

おそらく私は、そういった類いの言葉を発していたはずですが。

ですが、彼女は全てを理解していました。

理解した上で、私を見ました。

一瞬。

ぎこちない別れの言葉を交わし、

一度と私と彼女の目が合うことは、…ありませんでした。

::

ちくしょう。

ちくしょう。

ちくしょう。(叫ぶように)

::

夏が来るたびに、皮膚がひりひりするんです。

むき出しだった時の自分を思い出します。

そして、私はその痛みから逃げ出しました。

照明、金子狙い アウト

照明、秋吉狙い イン

秋吉 仮の話です。

::

何が仮の話なんでしょう。

何が本当の話なんでしょう。

どっちだって構わない。そうじゃないですか。

少なくとも私は、そう感じざるえませんでした。

いつからだろう。そう言つて、話し始めるようになったのは。

でも私はそうやって、脆い鎧を身につけることで、ようやく私のことを話すことができるようになったんです。

自分の軽さを、鎧の重さで補つて、ようやく人並みになれた様な気になれたのです。

::

私の父は犯罪者です。

そして私は、普通の社会を構成する、普通の人間です。

少なくとも私はそう思っていました。

そう願つて生きてきました。

普通であることが、私にとっての命題だったのです。

しかし、社会はそれを許さなかった。

::

私は負けたくなかった。

なぜなら、私は私だからです。

私は父ではないからです。

私は、私の道を歩いて良いはずだからです。

::

私は、私の道が欲しかった。

私だけの道が欲しかった。

社会というものが、広い道の上をみんな歩いて行くものだと薄々理解していたにもかかわらず、私は私だけの道を欲していたんです。

::

私の道はありませんでした。

その事に対する私の失望はかなり大きなものでした。

そもそも他の人と違う道を歩いて、社会に焦がれていたのに、みんなと同じ道を拒み、自分の道を探す。

今にして思えば、何とも滑稽な話ですが、私はその矛盾に、一切気付かずに、ただただ失望していたのです。

しかし私は光を見ました。

私は父が犯罪者になってから、神に対する憎悪と憧憬の念を同時に持っていました。
なぜ私だけが。どうか私を。

相反する思いの中で、私は光を見たのです。

それは、たまたまインターネットで見つけた、ただの人間でした。

加害者家族の支援団体でした。

私はその光にすがりました。

そして、時の経過とともに、私自身も誰かの光となることができました。

私の道などということはどうでも良くなりました。

ともに歩む人がいるということの幸せを、神に感謝しました。

私を救ったのが神ではないにもかかわらず、心の中で私は、神に感謝していました。

神などいないのに。

私を救ってくれたのは、他でもない、ただの人間だったのに。

私はこの上ない充実した日々を送っていましたが、それは長くは続きませんでした。

多くの人が知っている、ある事件の加害者家族の支援を、私たちが行っていたときでした。

大きな力による、歪曲された情報により、我々の仲間が酷く傷つけられることがありました。

そしてそれは、支援していた加害者家族と共に、命を絶つという、最悪の結末を招いたものでした。

歪曲された情報は流れたのにもかかわらず、その情報が世に出ることはありませんでした。

::

神はいませんでした。

そう、それまでだつて、神は私を助けてくれたことはなかったのに。

それなのに、私は神に感謝していた。

その報いなのです。

::

その報いに対して、私は無力でした。

それは同時に、私の神もまた無力だったのです。

私は失望しました。

何に。::社会に。

::

仮の話です。

あくまでも、仮の話です。

照明、暁転

照明、赤系が数本

照明、加藤狙い

加藤

僕は彼女を探すために、セミナーに足を運びました。

しかし、彼女に会うことはできませんでした。

単純にその日は不在だったただけなんです。

実際に彼女はあのセミナーに足繁く通っていて、たまたまその日は不在というだけでした。そこで彼女を諦めていたらどうなっていたのだろう。

たまたまそんなことを考えます。

実際に諦めるという選択肢は存在しないのですが、そういったことを考えるのも、たまには楽しく思えるものです。

何よりも、あのセミナーは、僕にとって、とても素晴らしいものに見えたのです。

素晴らしいというと語弊がありますね。

分かりやすく言うのには、何と言えは良いのかな。

必然。必然的なものを感じたのです。

僕は彼女を探そうという、好奇心でそこに行ったわけですが、その真意は、そこではなかった。

彼女とはすぐに再会することができましたが、僕の喜びは、最早そこにはなかった。

誤解しないでください。

彼女のご事は、それまで以上に大切に思え、実際にその後も、ご存じの様に、ずっと連れ添ってきました。

僕はそこで得る知識に、思想に歓喜しました。

そう、歓喜したんです。

身体の中に、もう一人自分がいて、その無意識化の僕が目覚まし、僕は、ようやく本当の自分に成れたというような感覚です。

僕は失ってきた、それまでの時間を取り戻すために、すべてを捨てて、知識、思想を貪り、歓喜しました。

それまでの自分は何も信じるものもなかったし、知識や思想というものに対して無頓着だったのもあって、僕は真綿の様に、生まれたての雛の様に、様々なことを吸収していきま

した。

時には共に涙し、語り合う中で。

時には、一方的に罵倒され、自分のすべてを否定されていく中で。

僕は知識と思想の甘美な世界にのめり込んでいったのです。

∴

素晴らしい時間でした。

とても、とても素晴らしい時間でした。

∴

そうしている内に、セミナーの中での、僕の存在感が増していきました。

いつからか、僕の話に陶醉しながら聞き入る仲間が増えていきました。

僕との繋がりを特に強くしたいと願っていたんです。

僕はただ単にこの世界を、世界の中の僕を知りたかっただけなのですが、そんな僕に賛同し、行動を共にしたいと願うようになっていたんです。

僕と教人の仲間で、新たな勉強会を立ち上げました。

∴

もちろん、彼女もいましたよ。

::

いたはずですよ。

どうだったのかな。

いたはずですよ。

いたはずなんです。

だって、ついこの前まで、彼女は僕の傍にいたんだから。

彼女は僕の傍らに、本当にいたのか。

::

いたんです。

そう思いたいだけなのか。

そう願ってるだけなのか。

でも、彼女は、いたんです。

::

その頃からです。

いや、僕が気づいたのが、その頃なんでしょう。

彼女が、不安そうな目で僕を見ていたんです。

最初は、僕が彼女だけの僕じゃなくなることに對する不安だと思っていました。

でも違いました。

彼女は、単に僕を、僕のことを不安に思っていたんです。

そしてそのまま、そう、そのままの不安そうな目で、僕を見ていたんです。

::

彼女の不安は的中したと言つていいでしょう。

音楽

照明、暗転

照明、青系数本とうつすらと地明かり

金子、秋吉、腕を後ろ手に組み、上卡に分かれて立っている

加藤、ゆつくりと登場

照明、地明かりアップ

加藤

楽しんでください。

楽しんでください。

大丈夫です。緊張する必要はありません。

あなたも。

あなたも。

あなたも。

楽しんで良いんですよ。

私もまた、皆さんと同じように、世界を探求しているだけなのです。

ここは宗教団体ではありません。

ですから、もちろん、私は神ではありませんし、特別な神の存在もありません。

ただ世界を探求しているだけなのです。

みなさんがその様に、私を崇めようとするのは、それは全くもって、私が望んでいることではありません。

私と皆さんの間に何の境界があるというのです。

私と皆さんの間には、なんの境界もないんです。

そしてまた、本来であれば、私と皆さん、さらには世界のすべての人々との間にも境界はないと私は考えます。

残念ながら、わが国には、見えないように、見えないように境界を作っていく、残念で醜い法制度が存在します。

その中で我々は思想を統制され、言論を弾圧され、自由とは名ばかりのカーブに縛られているのです。

そう、それこそが我々がずっと感じてきた、違和感の根源なんです。

社会に感じる違和感なのです。

ですが、ここにはそんなものは存在しない。

存在してはならないのです。

::

ですから、楽しんでください。

身体力を抜いて、皆さんの魂を自由にしてください。

そうすれば見えるはずですよ。

我々は一つであると。

ただ単に我々は一つの存在であると。

::

皆さんは私を感じていますか。

私は皆さんを感じています。

あなたの苦しみを。

あなたの苦しみを。

あなたの苦しみを。

あなたの苦しみを。

あなたの苦しみを。

あなたの苦しみを。

皆さんは感じていますか。

私の喜びを。

彼の喜びを。

彼女の喜びを。

彼女の喜びを。

彼の喜びを。

我々は一つなんです。

皆さんの苦しみは、我々全員の苦しみなのです。
私の喜びは、我々全員の喜びなのです。
さあ、どんどん魂を自由にしていくのです。
一つになるのです。
もつと魂を自由にしていくのです。
一つになるために。
魂を自由にするのです。
一つになりましょう。

二人の台詞が入ってから、音楽アップ

秋吉 魂を自由に。
加藤 そう、魂を自由に。
金子 我々是一つに。
加藤 そう、我々是一つに。
秋吉 魂を自由に。
加藤 魂を自由に。
金子 我々是一つに。
加藤 我々是一つに。
秋吉 魂を自由に。
加藤 もつと自由になるのです。
金子 我々是一つに。
加藤 一つになるということは、元に戻るということです。
秋吉 魂を自由に。
加藤 そう、魂を自由に。
金子 我々是一つに。
加藤 そう、我々是一つなんです。
秋吉 魂を自由に。
加藤 ：
金子 我々是一つに。
加藤 ：
秋吉 魂を自由に。
加藤 ：
金子 我々是一つに。
加藤 ：
秋吉 魂を自由に。
加藤 ：
金子 我々是一つに。
加藤 ：
二人 魂を自由に。

我々は一つに。

音楽、カットアウト

間 (10 秒くらい)

照明、地明り、ゆつくりとアウト

音楽

照明、床置き 目つぶし

加藤 今日あなたはあなたですね。
さあ、聞かせてください。
あなた方の苦しみを。

秋吉 私からでも。

金子 どうぞ。

秋吉、舞台中央の方へ

以後、加藤、秋吉、ある程度自由に動きながら

秋吉 私は無力です。

加藤 私も無力です。

秋吉 いえ。

私は本当に無力なんです。

加藤 あなたは、何に対して無力なのですか。

秋吉 私は救えませんでした。

加藤 救えなかった。

秋吉 はい。

救えなかったんです。

加藤 あなたは誰かを救おうとしたんですか。

秋吉 はい。

ですが、救えなかった。

誰一人として、私には救うことができなかった。

加藤 なぜそのように悲嘆するのですか。素晴らしいことじゃないですか。

あなたはとても優しい人なんですよ。

あなたの様に、誰かを救いたい。自分以外の誰かに対して、心を配ることができるという
ことは、とても美しいことです。

ですが、私は聞きたい。

なぜ救うのですか。

秋吉 ∴

加藤 救うとはどういうことですか。

あなたは、他人を救うことができるのですか。

秋吉 それは。

加藤 あなたは、神だというのですか。

秋吉 私は神ではありません。

加藤 だったらなぜあなたは誰かを救うことができるのですか。

秋吉 わたしはただ、

加藤 神はいない。

違いますか。

秋吉 神はいません。

加藤 だったら、誰も誰かのことを救えない。

違いますか。

秋吉 ；

加藤 あなたは言った。

かつて光が見えたど。

そしてそれは人間だったど。

その人はあなたを救ってくれましたか。

秋吉 ；いいえ。

その人は、誰も救っていません。

加藤 そうです。

その人はあなたを救おうとしていたのですか。

秋吉 いいえ。

加藤 そうです。

ですが、あなたはその人に救われた。

違いますか。

秋吉 その通りです。

加藤 そうなんです。

あなたは、その人に救われたんです。

結果論なんです。

誰も誰かのことを救えない。

ですが、誰かは誰かによつてしか救われないのです。

違いますか。

秋吉 その通りです。

加藤 救おうなどという、あなたの思いは、単なる驕りです。

その驕りが、あなたを苦しめるのです。

苦しいのですか。

秋吉 苦しいです。

加藤 あなたの苦しみが何かわかりましたか。

秋吉 申し訳ありませんでした。

私が間違っていました。

私は私以上の私であると驕り高ぶっていました。

加藤 ですがこれもまた事実です。
あなたは、誰かを救ってきました。

秋吉 そんなことは、
加藤 救ってきたんです。
あなたが救われたように、あなたの知らないところで、あなたに救われた人はたくさんいます。
なぜなら、あなたは優しい人だからです。

秋吉 ∴
加藤 優しいからこそ苦しいのです。

秋吉 ∴ありがとうございます。
ありがとうございます。
ありがとうございます。

加藤 神はいます。

秋吉 ∴さつき、神はいないって。
加藤 神はいます。
私とあなたの上に境界はない。
そう言いましたね。

秋吉 はい。
加藤 我々すべての人の間に境界はないと。

秋吉 はい。
加藤 我々は一つであると。

秋吉 はい。
加藤 そんな一つである我々と境界を持つ存在。
それが神なのです。
だからこそ、神は無力なのです。
我々と神の間には、絶対的な境界が存在するのです。
神は見ているだけなのです。いや、存在しているだけなのです。
そこにあるものなのです。

秋吉 神はいる。
ただそこにあるもの。

加藤 あなたが神に救済を求めることこそが、神の存在なのです。

秋吉 私が神を作るといいますか。

加藤 その通りです。
しかしながら、そんなことはどうでも良いと、私は思っています。

秋吉 どういうことですか。

加藤 デカルトは「我思う故に我あり」と言いました。

秋吉 はい。
加藤 それに対して、スピノザは「我思う我の不完全を」を説きました。

秋吉 はい。
加藤 どう思いますか。

秋吉 私には分かりかねます。

加藤 自分は本当に存在しているのか。
そう考えた時点で、自分は存在している。
自分の存在を疑った時点で、自分は存在しているというのが、デカルトの考えであり、
スピノザは、自分の知っている自分を、自分は完全に自分だと言えるのだろうか。
デカルトは疑わしいものが無いものが真理だと言っているからこそ、スピノザによれば、
デカルトの論理は破綻していることとなります。
そして、私はどう思うか。
私はそれは、どちらも正しいと思います。
あなたの苦しみは本当に存在するのですか。
あなたが苦しいと感じた時点で、あなたの中に苦しみがあるのです。
しかしながら、その苦しみを感じているあなたは、本当にあなたなのですか。
私たちは一つです。
あなたの苦しみを共有すれば、あなたは私になり、私はあなたになります。
あなたの神は、私の神でもあるのです。

秋吉 私の神は無力です。

加藤 そう、神は無力です。

秋吉 それなら、神はいない方が良い。

加藤 そう、神はいないのです。

秋吉 神はいない。

加藤 そう、神はいないのです。
あなたの苦しみを一つに。
あなたの喜びを一つに。
魂を自由にするのです。

秋吉 我々是一つ。

加藤 そう、我々是一つです。

秋吉 ありがとうございます。
ありがとうございます。
ありがとうございます。

秋吉、座りこみ、感謝している
加藤、金子の方を見て

加藤 あなたの苦しみを聞かせてください。

金子 私は私であることから逃げました。

加藤 どうしてですか。

金子 痛くて。痛くて耐えられなかつたんです。

加藤 あなたの痛みはどこからなのですか。

金子 生まれた時から。

加藤 生まれた時から。

金子 私はLGBTです。

加藤 それの何が問題がるというのですか。

金子 私の好意の対象は女性です。

加藤 その事があなたの痛みと関係するのですね。

金子 はい。

加藤 あなたは傷ついてきたのですね。

金子 はい。

加藤 そしてあなたは、あなたの存在そのものを、罪と感じているのですね。

金子 はい。

加藤 皆さん、聞いてください。

私の話です。

皆さんも簡単に想像できると思いますが、私はもてませんでした。

私は臆病だったので、それほど多くの回数ではありませんが、何度かぶられ、傷ついたことがあります。

恥ずかしい話ですが、告白する前に振られたこともあります。

私はセクシャルマイノリティではありませんが、普通に誰かを好きになり、振られ、傷ついたことがあります。

どう思いますか。

金子 その傷と私の傷が同じだというのですか。

加藤 違います。

傷ついたということは一緒かもしれませんが、私の傷と、あなたの傷は、大きさも深さも違います。

そうでしょう。

金子 そう思います。

加藤 私はあなたの傷を癒すことはできません。

先程も言ったように、私は無力です。

そしてまた、私の中では神も無力です。

あなたは神を信じますか。

金子 いいえ。

加藤 私はキリスト教徒ではありません。

ですから、もちろん、私の神はキリストではありません。

ですが、共感する部分があります。

そしてそれは、我々が生きていく上で、我々の魂に落ち着きを与えるのであれば、それこそが宗教の存在する意義だと、わたしは考えます。

私が求めるのは、魂の安らぎであり、そのための知識であり、考え方です。

キリスト教における、人間の原罪をご存知ですね。

金子 アダムとイブですか。

加藤 その通りです。

アダムとイブは神が創った純真無垢の存在とされています。

しかし、悪魔にそそのかされて、禁断の果実を口にしてしまい、羞恥心、猜疑心、嫉妬、

怒り、哀しみといった、純真無垢とは正反対の感情が芽生えました。

二人はエデンの園を追放され、地上で、男として、女としての、それぞれの苦しみを与えられました。

人間というものが、生まれながらに罪を背負っているのだとすれば、アダムとイブが人間の原罪の象徴であるのならば、男が女を愛することもまた、罪を犯していることではありませんか。

人間のエゴそのものが罪とされているのです。

言いかえれば、私も、あなたも、ここにいる全ての人も、皆罪人なのです。

それでも私は思います。

誰かを愛することが、罪であるはずがない。

誰かを愛すること、それは美しいことであり、我々にとって、もつともかけがえのない感情である。

金子

：

加藤

あなたが罪人であるならば、私もまた罪人です。

構わない。

ですが、その罪は、償わなければいけない罪なのではないでしょうか。

償うことが、罪を背負い生きていくことなのであれば、我々は罪を犯し続けていくことでしょう。

この先も誰かを好きになり、誰かを大事思つて生きていくでしょう。

金子

：

加藤

私にあなたの傷をいやすことはできません。

ですが、あなたの痛みを、我々にも感じさせてくれませんか。

金子

私は存在していても良いのでしょうか。

加藤

なぜ存在してはいけないのですか。

金子

私は誰かを好きになっても良いのでしょうか。

加藤

なぜ好きになつてはいけないのですか。

我々は罪人なのです。

私は全ての人が幸せであつて欲しいというエゴを抱えています。

共に誰かを大切にしたいという、エゴを、罪を犯しながら生きていきませんか。

魂を自由にしてください。

そこには性別も何もなく、我々は一つになれるのです。

あなたの痛みを一つに。

あなたの喜びを一つに。

魂を自由にするのです。

金子

我々是一つ。

加藤

そう、我々是一つなんです。

曲、カットアウト

照明、白系数本

照明、地明り

金子、秋吉、すつと立つて（その前の姿勢次第だけど）

秋吉 そんなあなたが、何故人を殺したんですか。

加藤 ::

ああ、そうか。

そうでしたね。

僕は殺人容疑で捕まったんですね。

見事なものです。

まるで気付かなかった。

まあ、僕はそれ位の人間です。

今も昔も。

秋吉 どうしてですか。

加藤 どうしてだと思えますか。

秋吉 ::

金子 ::

加藤 簡単な話です。

想像してなかったんです。

僕が作り上げた物が、僕の想像の範囲におさまらなかったんです。

そのパニックの結果です。

::

僕が僕の勉強会を立ち上げたように、

僕の勉強会の中から、新たな団体を立ち上げようとした者が現れました。

あなたたちも薄々感じていたかもしれませんが、所詮僕は、アマチュアな宗教家もどきです。

彼らは、激しく僕を罵倒しました。

僕の浅はかな知識を、思想を。

秋吉 だから殺したんですか。

加藤 まさか。

そんなことはありませんよ。

誰よりも、自分の軽薄さは、僕が一番分かっていましたから。

言っただけでしょう。

僕は自分に自信が持てない人間だったつて。

そんな自分が、ふとしたきっかけで、はりぼての様な自信を持つてしまったんです。

単純にパニックになったんですよ。

外出する家族に、「気を付けてつて」声を掛ける時、想像するのは、家族が事件や事故に巻き込まれないこと、つまり被害者になることじゃないですか。

加害者になることを気をつけてとは言わないであらうし、想像すらしないでしょ。

それ位僕は、自分の自信が崩れ去ることを想像できずに、パニックになっていたんです。

ああ、そうか。あなたが加害者家族の支援団体にいたという話も嘘なんですよんね。

秋吉 支援団体にいたのは嘘です。

加藤 加藤 ですが、実際に私が担当していた事件の、加害者家族が亡くなったことは、事実です。

秋吉 心を痛めましたか。

加藤 痛めました。

秋吉 良かったです。

加藤 何がですか。

秋吉 僕が感じたあなたが、全て嘘じゃなかったことです。

加藤 ∴

加藤 加藤 自信の自信が崩れ去っていくことに、僕は酷くうろたえました。

秋吉 怖かったんです。

加藤 パニックになって、ただただ怖かったんです。

秋吉 結果殺してしまっただけです。

加藤 ∴

加藤 一番最初は、そんなものです。

秋吉 不思議なもので、僕はただただ怖れていたのにもかかわらず、普段僕が言っていたこととは真逆なことが目の前で起きたのにもかかわらず、その場にいた数人の者は、畏怖の念を抱くようになっただけです。

加藤 ∴

加藤 知っていますか。

秋吉 誰かを殺すと、驚くくらい、物事は解決していくんですよ。

加藤 ∴

加藤 後は、そらだな、…

金子 邪魔だった。

加藤 邪魔だったから殺して、問題を解決しただけの話です。

金子 彼女は何で殺す必要があつたんですか。

加藤 彼女は殺してませんよ。

金子 ∴

秋吉 ∴

加藤 何を言ってるんですか。

金子 僕は、彼女を殺してませんよ。

加藤 あなたの前で死んでいただけでしょ。

金子 あなたが殺したんでしょ。

加藤 ∴

加藤 話しても良いですか。

金子 続きを。

加藤 ∴

加藤 彼女は僕の環境を不安に思っていました。

金子 僕という人間に相応しくない、大きな場所に。

加藤 ですが、言ったように、僕は僕自身が作ったばかりで身動きが取れなくなっていました。

加藤 ∴

加藤 おそらく、最早知っているとは思いますが、僕は、僕自身の手で、若しくは僕に心酔する

誰か他の人の手で、8人の人間を殺しました。
理由は様々ですが、簡単に言えば、我々の邪魔をする人たちです。

::

彼女はその事を知りませんでした。
知られるわけにはいかなかった。
知られたら、彼女は僕の傍からいなくなってしまう。
彼女にだけは知られたくなかった。

::

秋吉 でも知られてしまった。

加藤 はい。

8人目を殺す時に、たまたま話を聞かれてしまいました。

秋吉 だから殺した。

加藤 言っただけでしょう。

彼女は殺してないつて。

::

その事を知ってから、彼女は今まで以上に、僕のことを不安な目で見るようになりました。
辛かった。

::

彼女とね、話をしたんです。
もうやめようと言われました。
解散して、罪を償おうと言われました。
僕はそれはできないと言いました。
僕の救いが必要な人いる。
そんなことはできないと。

::

あなたは誰も救えない。
そんなことはない。僕に救われた人を見てきたら。
それは違う。

あなたの言葉は、確かに人を動かしてきた。
でも、あなたの前には縛られてる人がいるだけ。

僕は縛ってなんかいない。
僕は皆の魂を解放しているだろう。

あなたは魂の解放なんてしていない。

違う。

違う。

違う。

違う。

だったら、私に見せてみてよ。

あなたが言う、魂の自由を。

あなたが言う、一つになるということ。

魂とは何なの。
一つになるとは何なの。
私とあなたは何なの。
私たちは一つになれたことはあるの。
私に見せてみてよ。

::

彼女と僕は一つになったんです。
僕は彼女の魂を自由にして、彼女と一つになっただけだ。

秋吉

それは違う。

加藤

::

金子

::

我々に通報してきたのは、彼女です。

加藤

::

金子

彼女は、あなたのことを心配していました。

あなたが話した彼女との話。

ほぼ同じことを彼女も話してましたよ。

彼女は、あなたと出会う前から、あのセミナーに通っていたそうです。

彼女は、あなたがあのセミナーに彼女を探しに来てくれたことを、本当に嬉しく思ったと言っていました。

その頃の彼女は、あのセミナーに不信感を抱いていて、退会しようと思っていたそうです。

それは他にもない、あなたが彼女の心を満たしていたからじゃないでしょうか。

加藤

::

金子

ですが、あなたは逆に、あのセミナーにのめり込んでしまった。

彼女は責任を感じたはずですよ。

自分のせいで。

彼女はあなたより長く、あのセミナーに通っていたこともあって、あなたよりあのセミナーの人たちを知っていました。

あなたが、この勉強会を立ち上げるにあたって、あなたを担ぎ上げた人たちに、多少の不安を感じていたと言っていました。

::

だからこそ、彼女はずっとあなたの傍にいたんだと思います。

あなたの傍らで、不安なんかじゃない、あなたを心配していたんじゃないでしょうか。

加藤

::

秋吉

彼女は、いずれ自分が殺されると言っていました。

その時に、あなたを逮捕して、罪を償わせて欲しいと言っていました。

彼女は、わざとあなたを否定して、あなたに殺されるように仕向けたんじゃないでしょうか。

彼女なりの、あなたと一緒に罪を償うということだったんじゃないでしょうか。

加藤

違う。

違っ。
違っ。
違っ。

音楽

照明、地明り 暗くなる

照明、加藤狙い

金子
秋吉

：：
：：
こんなことを言っても、しょうがないんですが、
私は、あなたのことが、嫌いじゃなかったです。
私たちの前にいるあなたは、必死だった。
確かに、あなたは軽薄な思想家だったかもしれない。
でもあなたは、その知識を目いっぱい使って、必死に私たちを励ましてくれた。
必死で私たちを救おうとしてくれた。
そんなあなたは、嫌いじゃなかった。

加藤
金子
加藤

：：
私がLGBTなのは、本当です。
私もあなたのこと、嫌いではなかったです。
：：

金子、秋吉退場

金子、途中で立ち止まり、振り返る

秋吉も振り返る

金子
加藤
秋吉

彼女、あなたとの昔話をしている時、とっても幸せそうでした。
そして言っていました。
また、あの風鈴の音を聞きながら、二人で一緒にいたかったって。
：：
あなたの世界は、本当は、ずっとあなたの傍にあつたんじゃないですかね。
彼女は、単純に、あなたと一つになることを願つてたんじゃないかなって、私は思います。
だからずっと、あなたのことを、あなたの傍で、信じてたんじゃないでしょうか。

照明、加藤狙い

加藤
：：

カラカラカラ。
カラカラカラ。
カラカラカラ。

聞こえない。

俺には、あの風鈴の音が、聞こえないよ。

s. e. 風鈴の音→ラストの音楽

照明、加藤狙い ゆっくりと暗くなる

::

どこにいる。

なあ、どこにいる。

どこにいるんだよ。

なあ。

::

一人にしないでくれよ。

頼むよ。

僕を一人にしないでくれよ。

::

照明、ゆっくりと暗くなる

加藤

お願いがあります。

迎えに来てください。

お願いします。

迎えに来てください。

お願いします。

迎えに来てください。

暗転